

水母の骨

勿忘草

——たまにはこれで羽根を伸ばしてきなよ。

男が妻に渡した、フェリーで巡る旅行チケット一枚。

彼女は大層喜んで、けれど一緒に行けない息子と夫のことを気遣っていた。母さんだけ行くわけにはいかないわ、そう尻こみをする彼女に、息子は言った。

——将来お金を貯めて、僕が三人分のチケットを買うよ。それしたら一緒に行こう。母さんはオススメの場所を探してきて。

「けれど、その願いが叶うことはありませんでした」

とある落ち着いたカフェの片隅にて、二人の男女が話している。蒼人はうつむいて、ぽつぽつと続けた。

「妻の乗ったフェリーは、最終日に座礁事故で海に沈み、彼女は帰らぬ人となりました。それから私は、息子を母に預けるべく、実家に帰りました」

彼の実家は小さな港町で、蒼人の母はこれまた小ぢんまりした定食屋『くらげ』を経営している。父は何年も前に他界しており、蒼人が単身赴任している間、息子の瑞樹は小学生ながらも懸命に店を手伝っているらしい。

「私がチケットなんてプレゼントしなければ、こうはならなかった。最初はそう自分を責めていましたが、周りの皆さんのお

かげで、私は立ち直ることができました。瑞樹を一人前になるまで育てることが、妻への最大の恩返しだと思えたんです。…：けれど」

あるとき蒼人に、母から電話があつた。瑞樹が、夜中に海辺へふらふらと出かけていくことが続いているらしい。危ないからやめなさいと何度も叱つたのだが、一向に改めない。

『母さんが帰ってきたんだ』と、瑞樹は言いました。『僕は母さんに会いに行つてただけだよ。その何がいけないの』と」

「依頼内容は亡霊調査ということですか？」

向かいに座っている女が口を挟んだ。蒼人が顔を上げて、姿勢を正す。若々しい顔には戸惑いと疲労の色が浮かんでいた。

「はい。…：あ、いえ、何といますか…：母がこつそり、後をつけたことがあつたそうなんです、そのとき見えたのが、人の形をしていないものだったらしくて」

「ええ、すでに調査員が現地へ向かい、異邦者反応を確認しています」

「い、いほうしゃ…：ですか」

女がうなずく。それから笑みを浮かべ、蒼人を元気づけるように力強く言った。

「亡霊か化け物かはともかくとして、それが『ヒトならざるもの』であるということです。私たちメモリートの専門分野ですので、どうぞご安心ください」

松原しずく。それが彼女の名前だった。生粋の日本人であるのだが、彼女の外見ときたら赤茶色のショートカットの髪に、藍色の目、きめ細やかな白い肌と赤い唇。これは彼女が生来持っているものである。染めたわけでも、両親のどちらかが外国人というわけでもない。

特殊捜査戦闘部隊メモリート日本本部に所属し、二十二歳という若さながらも日々奮闘中だ。メモリートという職業を一言で表すならば、同業者の青年の言葉を借りて『警察と陰陽師を足して二で割ったようなもの』その歴史は平安時代にまで遡るといわれている。

……さて、色々説明すると進まない。ひとまず小難しい話は置いておくとして、しずく女史に話を戻そう。

場所と時は移って、翌日の午後三時。『くらげ』の店内へ。

「ここらへん、漫画『ドルフィン』の舞台の元ネタになった町らしくて！ ファンとしては聖地巡礼したいところなんだよね！ だからっ、できれば海にも行ってみたいなー、なんて」

そこには、白いワンピース姿で熱弁するしずくがいた。

小学五年生の少年、瑞樹は「そうなんですか」と無難な返事をしたが、「オタクかよ」と顔にはしつかり書いてある。しずく

は気にせずに、海鮮丼を綺麗にたいらげた。メモリートと明言できないのもあるが、聖地巡礼というのめあながち嘘ではない。その顔立ちゆえに、店に入るなりぎよっとした顔をされるのは慣れっこだし、外国人が観光に來たと思われることもまた然り。料理を運んでくれた瑞樹を呼び止めて「海辺に行きたいんだけど、どこから入ればいいかな？」と日本語で問うたところ、いぶかしげな顔をされるのも予想できていた。

「あ、私ハーフなんだ。だから言葉の心配はしなくていいよ！」そう言っでやると、ようやく瑞樹がほっとした顔になる。店内を見回し、祖母とアルバイトの少女二人でも十分回せるのを確認すると、彼は青いエプロンを外しながら言った。

「よろしければ、僕がご案内しますよ」

「ほんと？ ありがとう！ じゃあお礼をかねて、ここのソフトクリームも頼んじゃおっかな。瑞樹くんのぶんも買ってあげるね、歩きながら食べよ！」

瑞樹は眼鏡という特徴も相まって、年の割に落ち着いているように見える少年だったが、ソフトクリームを与えられると年相応に喜んでいた（無論、最初はかなり遠慮がちで、半ばしずくが押し付けるようにして買い与えている）。

平日の午後、当然ながら砂浜に人はいない。しずくは麦わら帽子が飛ばぬよう左手で押さえながら、瑞樹と二人で歩き出し

た。水色の半そでのパーカーが海風に揺れる。

「綺麗な海だねー。ごみとかもないし」

「夏になるとたくさんクラゲが来るので、泳ぐのは禁止になってるんです。中には毒を持ったやつもいるので」

「あ、じゃあ今は泳げない感じか。もしかして瑞樹くんのお店の名前も、それにちなんでんの？」

瑞樹は首肯した。夏になるとクラゲが大量に見られることのほかに、クラゲが『海月』と書くのにも引っかけている。月のごとく、漁師たちの道しるべとなるように。

「ばあちゃんが付けた自慢の名前です」

にこにこ笑いながら、しずくは相槌を打った。

見ている限り、普段の瑞樹の行動に何も異常な点はない。

「……やっぱり、問題は夜か」

しずくは瑞樹と別れ、ソフトクリームを食べ終わると、パーカーの胸ポケットから手のひらサイズの石を取り出した。透明な棒状のものだ。砂浜に立ち入った時から、淡い青色に光って発熱していた。

——ここに、この場所の『記録』メモリーがある。

辺りを見回す。人影はなかった。海の中に歩きながら入り、膝丈のワンピースが水面に届くぎりぎりの深さまで行くと、石を握りしめ、目を閉じて念じる。

次の瞬間、足元からずぶずぶと、柔らかな粘土の中に飲み込まれていくような感覚がしずくを襲った。静かにそれを受け入れ、しずくはその場に立ち続ける。やがて、ブツリという音と共に全ての音が途切れた。

『……か……さん』

遠くから、ノイズ混じりの瑞樹の声がする。しずくは目を開けた。辺りは暗くなり、闇色の波が足元でうごめいている。声のした方を見ると、砂浜に立っている瑞樹の姿があった。

『……母さん、こつちだよ、母さん！』

しずくは瑞樹の方へ歩いて行った。足に波の中を行く感覚はない。体は透明になり、自分にすら自分の姿は見えない。

今、彼女は過去にいる。いや、正確には過去にあった出来事を見ている。しずくの持っていた石には、その地であった出来事、つまり『記録』を持ち主に見せる力があるのだ。

『母さん、今日も来てくれたんだね』

瑞樹の隣まで来ると、彼が見ているものを探す。

あれだろうか。しずくが立っていたところより奥の方に、ぼわりと白く光っているものが見えた。

『僕、もう絶対に、母さんを探しに海の中に入ったりしないよ。だから母さん、もっと近くに来てよ』

光は動かない。瑞樹は残念そうにうつむいて、それでもしば

らく砂浜に立ち続けていた。

しずくは瑞樹の隣から離れ、光の方へ歩いていく。瑞樹がまた話しているのが聞こえた。

『母さんでしょ。母さんなんですよ。見えなくなっただけわかるよ、母さんがいるって感じがするんだもん。僕に会いに来てくれるんだよね、母さん』

光のところまでたどり着くと、しずくは目をこらした。

……そして、見た。三メートルはあるであろう、とてつもなく巨大なクラゲの姿を。

狭い通路の中に押し込まれていく感覚から抜けると、再びブツリと音がして、環境音の中に戻ってきた。現在に帰って来るなり、しずくは身震いする。ずっと足を海につけてじっとしていたせいだ。

「あー、さむさむ」

急いで海から出て、ずぶ濡れのサンダルを手につく。橙色に染まる砂浜に、足跡が点々と続いていった。

次の日。

しずくは瑞樹が学校に行っていると思われる、午前十時に『くらげ』に行った。これ以上遅くなるとお昼時になってしまう。

依頼人の母、奈美子はすでに話を聞いていたらしく、しずく

が名乗るとすぐに居住スペースに招いてくれた。

「何でも協力します。どうか瑞樹を助けてください」

奈美子は涙ながらに頭を下げる。しずくはその細い双肩に手を置いて、奈美子の息子にしたように、力強くうなずいた。

それから彼女に、瑞樹たちの家族写真を何枚か見せてくれるように頼んだ。

「見終わったらすぐ、おいとましますから。どうぞ、奈美子さんはお店に戻ってください」

お茶を持ってこようとする奈美子をそう言って止め、しずくは積み上げられたアルバムの中から、母親が写る写真を探し始めた。

「……これかな？」

瑞樹たちと写る、穏やかな顔をした女性。いつも髪を後ろでまとめしており、長さは時期によってばらばらだが、ショートカットにしている写真は一枚もなかった。

後ろ姿を撮った写真を見ると、ずっと黒のバレッタ（髪留め）で髪を留めている。飾りのついていない質素なもので、長さは十センチ弱だろうか。他に装飾品はなく、化粧つきのない素朴な顔からも、瑞樹の母親の性格が見て取れる。

「瑞樹くんは、お父さん似だったんだねえ……」

切なげな表情でつぶやくと、しずくはアルバムを閉じた。

『バレッタ、ですか？』

「はい、黒いバレッタ。リボンも何もついていないものです。写真を拝見したところ、奥様がいつも身に着けているようです。たので」

電話の向こうで、瑞樹の父親の蒼人がしばし沈黙する。

『……多分、私が結婚前にプレゼントしたやつです。そうか、ずっと着けてくれたんですね。全然気づきませんでした。お洒落とか、あまりしないやつだったんですね……』

「ええ、着けていない写真はほぼありませんでした」
ず、と鼻をすする音がする。

『確かに、あの日も……旅行に行った日も、髪を後ろでまとめていました。そのバレッタを着けていたんですね。大切にしてくれていたんだなあ……』

通話が終わると、しずくは『くらげ』まで行き、店に入ろうとする瑞樹に声をかけた。黒いランドセルを置いてきてもらい、再び海まで行く。

「瑞樹くん、昨日は案内ありがとう。今日はね、少しお話があるんだ」

瑞樹が不思議そうな顔をする。しずくは自分の胸に手を置き

て、続けた。

「私はきみのお父さんに依頼されてここに来たメモリート。瑞樹くんのお母さんのことで、協力してもらいたいことがあるの」
一瞬にして瑞樹が青さめる。かわいそうだとは思いつつも、しずくは逃げようとする瑞樹の腕を掴んだ。

瑞樹がその手を振り払う。

「メモリートって、悪霊祓い師だろ！ 母さんは悪霊じゃないよ、僕に何もしてこないもんつ。僕が母さんの所まで泳いで行こうとしたら、ダメって、危ないって怒るくらいなんだぞ！」
「悪霊じゃないけど、このままじゃいづれそうなるよ！ 辛いかもしれないけど、これは瑞樹くんにはできないことなんだ。だからっ」

しずくの言葉を最後まで聞かず、瑞樹は駆け出した。しずくは後を追ったが、この町の地理を把握している彼に追いつけるわけがない。気が付くと、住宅街に立ち尽くしていた。

……家に帰ったらしずくがいるだろう。そう思うと、瑞樹はどうしても帰る気になれなかった。とつくに太陽は沈み、あちこちから夕食の匂いがする。

とぼとぼと彼が当てもなく歩いていると、声をかけられた。

「瑞樹くん、どうしたの。こんなところで」

完全に瑞樹を馬鹿にした、嫌らしい声。何度か店にも来たこ

とがある、金髪の中学不良三人組だった。客に絡んでいたら奈美子に追い出されたことを根に持っており、時々瑞樹にも声をかけてくる。

いつもなら無視して通り過ぎるところだが、人気がない夜の住宅街である。さすがに、瑞樹の顔も恐怖に引きつった。

「最近さあ、夜に海辺に行つてママア、ママアって言つてるって聞いたけど。お前の母さんはあ、もう死んだんですう」

「帰つてくると思つちやつてんの？ それ、『クラゲノホネ』つてやつですよ。意味わかる？ クラゲに骨つてないだろ、だからありえないことの例えなんだつてよお」

「うわ、お前天才。何でそんな言葉知つてんだよ」

「えー、何か中二病の弟がことわざとかにハマつてっからー」

「まあその通り、『クラゲノホネ』だよな！」

『くらげ』だけにな！

三人組が笑う。瑞樹はこぶしを握りしめた。祖母が願いを込めた付けた名を、そんな風に馬鹿にされる筋合いはない。

「お前の母さんがあ、帰ってくるわけないだろー？」

ぐっとタバコくさい顔を近づけられる。涙が滲んだ。そのときだった。

「私、そういうの嫌いなんだよね」

氷のように冷たい声が聞こえたかと思うと、いつのまにか三

人組の背後にしばらくが立っていた。

一番背の高い、リーダーと思われる少年が、ぎよつとした顔で振り向く。しずくは容赦なく彼の首を掴んだ。彼女の手一面に少年の汗がついたのを確認すると、すぐさま離す。

「……て、てめ、何す……」

「まだ君たち、若いのにねー。ここまで行っちゃったら、ちよつと痛い目見ないとわかんないか」

言うがはいいか、しずくが少年の口に右手を押し当て、何かを掴むように指を曲げる。爪が頬に食い込んだ瞬間。

——ごぼり。

「がぼ……っ」

嫌な音と共に、少年の口からはみ出さんばかりに大きな泡が生み出された。赤黒い液体と、白い液体が混在した汚い泡。しずくがゆつくりと手を離していくと、彼女の手にくつついたように、泡も口から出て行こうとする。

あまりの出来事に、周りは呆然とその様子を見守るしかない。凍りついたように、全てのものが静止していた。

「今なら私、君の体の水分全部抜けるよお」

けらけらと笑うしずく。段々少年の顔が赤くなり、目が上を向き始めた。唇が紫色になつていく。

「……」

しずくが目を細め——……そのまま、閉じた。
どすん。

「がっ……げ、ほっ。げほげほげほっ」

糸が切れたように少年が倒れこみ、地べたで体を折り曲げながら激しくせき込んだ。泡は綺麗になくなっている。仲間二人と瑞樹が蒼白になってその様子を見てみると、片手を下ろしながらしずくがにまあと笑った。

「君たちもやってみる？」

中学生らが逃げ出したのは、言うまでもない。

『くらげ』まで瑞樹を送って行く最中、微妙な距離を感じたしずくが聞く。

「自分もやられると思ってるの？」

答えない瑞樹。不良たちを追い払ってくれたことには感謝しているが、あのまま彼らを殺せたのだと思うと、しずくに近づく気になれなかった。

「あははっ。そんなことしたら、私一年無給だよ。メモリートは一般市民に危害を加えちゃいけないの」

「……思いつき加えてたじゃん」

「うん、だから内緒だよ？ あの子たちは警察には言わないと思うから、瑞樹君が何も言わなければ大丈夫」

小学生相手に恐喝していたら体の水分抜かれそうになりました、とは言えない。大体訴えようにも、しずくは結局証拠の残るようなことは何もしていないのだ。

瑞樹は黙り込んだ。メモリート。噂には聞いていたが、本当に特殊能力を持ったやつらしい。となると、母の話も……。

「しずくさん」

「ん？」

「……母さんの話、もっと詳しく聞かせて」

しずくが二回、ゆつくりとまばたきをする。瑞樹がちらりと彼女の顔を見上げると、うなずいた。

「わかった」

三十分後、彼らは夜の砂浜にいた。しずくの見たクラゲの、あの白い光が見える。

一通りの話を済ませたとき、瑞樹は混乱した顔をしていた。それでも、自分がやるべきことはわかっていた。

母のところまで。あの、巨大クラゲのところまで行く。

「……多分ダイバーさんの力を借りると、警戒して逃げちゃうと思う。だから、私も行けない。君がその身一つで、一人で行く必要がある」

しずくが厳しい声で言い聞かせる。

「これから私は、あなたが水の中で息ができるようになるよ。」

でもその代わり、地上では息ができなくなる。私が潜つてと言ったら、すぐに水に潜ること。そして、地上へ帰つて来られるようになったら、一番に私のところへ来ること」

緊張した顔で、瑞樹はうなずいた。

「最後に。水の中では、絶対に言葉を話してはいけないよ。それはこの術の『解き方』ではなく『破り方』。君の体に、今まで吸うはずだった水が一気に入ってきて、瞬時に窒息死する」

瑞樹の顔が蒼くなる。

しずくは苦笑いを浮かべた。

「……メモリートのことを、悪霊祓い師と君は言ったね。でもね、私たちに完全に何かを滅する力はないの。自分たちだけの力で問題を解決するなんて、できないことの方が多いんだ」

「……」

「矢継ぎ早に色々言ったから、まだよくわからないと思う。けどもう時間がないかもしれない。強すぎる力はいずれ暴走する。そうになったら、私はあのクラゲを殺さなくてはいけない」

店から持つてきた、調味料を入れるための小さな空き瓶。しずくは手で海水をすくい、しばらく見つめた後、慎重に、瓶に水を流し入れる。そして、瑞樹に差し出した。

「はい。今からこの水を一気に飲み干してもらおうよ。……ただの海水で真似をしないでね。これは私が味方をするよう頼んだ水だから、君の身を守ってくれるけど、ただの海水は悪戯に飲

みまくっていいものじゃないから」

「わかってるよ、しずくさん。僕の方が海には詳しいんだから」
思わず瑞樹が苦笑すると、しずくは微笑んだ。

「うん、そうだったね。瑞樹くんなら大丈夫だ」

大丈夫。うん、とうなずいた。大丈夫だ。大丈夫。

瓶の中の水を飲み干すとき、足が震えた。てっきり塩辛いものかと思ったら無味無臭で、飲み下す感触もほぼない。瑞樹の喉の上下が終わりかけたとき、しずくの鋭い声が飛んだ。

「潜って！」

瓶を投げ捨て、勢いよく海に飛び込んだ。耳の中がざわめき、視界が無数の泡に閉ざされる。と、ほわりと温かいものを胸の辺りに感じ、周りが嘘のように静まり返った。

……行かないや。母さんのところへ。

服を着たまま泳いでいるのに、不思議と重さは感じない。今まで幾度もこの海で泳いだことが、こんなにすいすいと泳げるのは初めてだった。しかも息ができる。

前は「来ちゃダメ、危ない」という母の声がしたのに、今回は何も聞こえない。白い光にぐんぐん近づいていく。眩しく感じるほどに光に近づいたとき、しずくの言葉を思い出した。

『お母さんの靈魂が来ているわけじゃない、と思う。来ているのは、お母さんの祈りがクラゲに宿った物だよ』

光を放っているのは、クラゲではなかった。クラゲの透明な体の中に、細長い物が浮いている。

瑞樹は声をあげそうになった。光を放っているのは、バレッタだった。いつも母が着けていた黒いバレッタ。今は海水で色が抜け、白くぼろぼろになってしまっているが、確かに母のバレッタだ。

巨大クラゲの触手が、波に揺れながら動き始める。バレッタが吐き出され、触手に絡め取られた。そのまま、瑞樹に差し出される。

(……母さん)

クラゲの姿をしていても、母の気配を感じて仕方がなかった。けれどそれは、このバレッタから出ているものだったのだ。

瑞樹はバレッタを受け取る。すると、巨大クラゲはゆらめきながら泳いで行き、すぐに闇に溶け込んでいってしまった。

(ありがとう)

口だけ動かし、クラゲに言った。

(本当に、ありがとう)

しずくの話は、以下のようなものだった。

人に大切にされて、いつも身に着けていた物などには、力が宿ることがある。母の場合はバレッタで、持ち主が死した後も、バレッタは『瑞樹たちの所へ帰りたい』という、持ち主の願いを叶えようとひとりでに動き出したのだろう。

ただ、物は所詮物だ。長距離を移動する力はない。

『私たちメモリーとの間では、巨大すぎる生物は注意して見ろと言われてるの。なぜなら、理^{ことわり}から外れた者だから。同じく理から外れた者と波長が合いやすく、協力し合って何かをすることがあるんだ。今回もそのケースだよ』

バレッタはあの巨大クラゲと同調し、海を泳いで瑞樹の住む町までたどり着いた。しかし、クラゲは水の中から出ることはできない。しかし、瑞樹に來させると溺れてしまうかもしれない。あのような巨大な体ゆえ、浅瀬に行くこともできず、あそこにとたえずんでいるしかなかった。

しずくを待っていたのは、奈美子たちだけではなかったのだ。『お母さんの声が聞こえたりするのは、バレッタがもうお母さんの一部だったからだと思う。バレッタに宿るお母さんの声の記憶が、瑞樹くんに届いていたんじゃないかな』

しずくの近くまで泳いで帰ると、しずくが瑞樹を海から引っぱり上げ、口に手を当てた。泡が生まれ、引きずり出される。一瞬水分を抜かれるのかと思ったが、少し吐き気がしただけで、あの少年のようににはならなかった。

先ほど飲んだ、しずくが味方にしたという水を抜いたのだ。

「いいよ、息吸って」

ただ、長いこと通常の呼吸はしていなかったたので、瑞樹は軽くせき込んだ。その間、しずくはずっと背中をさすってくれた。

「お疲れ様。本当に、よく頑張ったね」

瑞樹はちゃんと、バレッタを持って帰ってきていた。

しずくが持ってきてくれていたバスタオルで体を拭かれている最中、彼女がぼつりと言った。

「あのね、私一つ嘘を吐いてたの。私はハーブじゃなくて、生粋の日本人なんだ」

「……え？」

「じゃあ何で、こんな外見なのかって思うでしょ。私は四大元素能力者の一人なの」

「ヨンダイゲンソ？」

「この世を構成していると言われる元素のこと。火、風、水、

土の四つだよ。四大元素能力者は他の能力者たちと違って、突然変異をした能力者だから、私はこんなヘンテコな外見をしているんだ。他の三人の能力者たちも、その血筋からは生まれるはずがない色の髪や瞳を持ってるよ」

まず瑞樹には元素が何なのがよくわからないのだが、曖昧にうなずいた。

「しずくさんはもしかして、水の能力者なの？」

「そうだよ。よくわかったね」

体を拭き終わると、今度は髪だ。このまま帰ると、ただでさえ今心配しているであろう奈美子が卒倒しかねない。一応、自分と一緒に連絡はしてあるのだが。

「……そして私のこの姿が理由で、お母さんが家を追い出されてしまったの」

「どういうこと？」

「私の家、結構厳しくてね。外国人と浮気したんだろうって。お母さん、私が生まれると早々に離婚させられて、追い出されたんだって。今じゃどこに住んでるかもわからない……」

しずくに髪を拭かれているので、彼女の顔はわからない。瑞樹は黙っているしかなかった。

「まあ、だからあんなことしちゃったんだだけだね！」

「ぱつ、と明るく言うしずく。不良の一件だろう。」

瑞樹に同情したのもあるが、あの「お前の母さんが帰ってく

るわけないだろ」発言にカチンときたのであった。

「いつか、会えるといいね」

「うん。できれば生きているお母さんに会いたいけれど、亡くなってるならせめて骨だけでも見たいんだ。そうしたら、それはそれで折り合いが付くから」

強いなあ、と。瑞樹は思った。

瑞樹の母の遺体は発見されていなかった。海の藻屑となつてしまったのだ。それもあつて、瑞樹は母が死んだことをきちんと受け止められていなかった。骨壺だって空っぽなのだ。

正直今も、母がどこかで生きているような気がしてならない。

翌朝、起きた時には家にいた。あの後気が抜けて、気絶するように眠ってしまったらしい。祖母から、しずくは瑞樹宛てに置手紙を残して、もう帰ってしまったのだと聞いたとき、少しだけ寂しく感じた。

奈美子はもう何もかも聞いた後のようで、ただ「おかえり、瑞樹」と言ってくれた。

「蒼人がね、近いうちに帰ってくるそうだよ。そうしたら、二人で旅行に行っておいで。ちゃんと、そのバレッタも持ってね」
母の唯一の形見。クラゲが悪霊になる危険と隣り合わせにして、持ってきてくれた物。

『亡くなってるならせめて骨だけでも見たいんだ』

しずくの言葉が思い出される。

……そうだ、しずく。祖母から受け取った水色の便せんを開けると、驚くほど美しい字でこう書かれていた。

【瑞樹くんへ。もつとゆつくりしたかったんだけど、ごめんね、もう帰らなきゃいけないかったんだ。もう一度、『くらげ』の海鮮丼が食べたかったな。それに、泳がないと『ドルフィン』の聖地巡礼した意味がないよ。……やっぱりまた来ようつと。

あとね、昨日同僚にメール打ってて気づいたんだけど、くらげ、って『海月』だけじゃなくて『水母』とも書くんだった。

瑞樹くんにぴったりだなんて思ってた！

将来、ぜひぜひ瑞樹くんみたいな息子が欲しいなあ（笑）

それでは、くれぐれも風邪をひかないようにね。また一緒にソフトクリームを食べましょう。

何かまたおかしなことが起こったら、いつでもメモリートを頼ってください。

松原しずく】

瑞樹はもう一度バレッタを見つめ、わずかに微笑む。

あちこちが擦り切れてボロボロになっている、もはや白くなつたバレッタ。先の方は割れて鋭くなり、少し触るだけで崩れそうである。

……まるで骨のようだった。

「ばあちゃんを置いていくわけにはいかないよ。父さんとは、隣町に遊びに行くだけで我慢する」

「でも、それじゃあ……いいんだよ、ばあちゃんのことなんて」

「ううん、将来お金を貯めて、僕が三人分のチケットを買うよ。そしたらみんなで一緒に行こう。母さんオススメの場所を見に行こうよ」